

札幌彫刻美術館友の会会報

いすみ

第 13 号

2005 年 10 月 1 日発行

(題字:國松 明日香氏)

本郷新彫刻シリーズ 13



「石狩一無辜の民」

(石狩市大字弁天町 49 番地)

この像はもともと中東戦争で犠牲になった多くの無実な人々の悲運に涙した本郷新が昭和 45 年に痛恨の思いをこめて制作した 15 点の無辜の民シリーズの一つ「虜われた人(1)」と同型のもので、昭和 46 年の現代国際彫刻展に出品され、話題を呼んだ作品である。

その後、本郷新の希望で彼が愛した石狩浜に昭和 56 年 6 月 30 日設置された。

高さ 2m、幅 3 m、奥行き 1.5m の大作。

(撮影 仲野三郎会員)

## 目 次

本郷新彫刻シリーズ 13 「無事の民」	表紙
目次 彫刻美術館行事予定	2
卷頭言	野又圭司 3
ロシア紀行	橋本信夫 4
本郷新賞受賞記念展開催に寄せて	井上みどり 6
「野外彫刻めぐり」と「まちづくりコンサート」	7
特別寄稿「わだつみ像」余闇（下）	小尾 陸 8
本郷新のちょっとといい話 2	仲野三郎 10
シンポジウム「野外彫刻のアートツーリズム」要旨	11
ギャラリーシリーズ9 「道新ぎやらりー」 原 典夫	13
抜海の目「なぜ、そこにあるのか」	13
ビデオ制作第2弾に挑戦	14
展覧会案内	14
編集後記	14

## 札幌彫刻美術館展覧会・行事予定（10月—12月）

## 本館

10月 10 日まで	第 12 回本郷新賞受賞記念彫刻展
10月 11 日—14 日	展示替えのため臨時休館
10月 15 日—3月 20 日	平成 17 年度後期収蔵作品展「鳥を抱く女シリーズ」

## 記念館

10月 10 日まで	本郷新の野外彫刻
10月 11 日—14 日	展示替えのため臨時休館
10月 15 日—3月 20 日	平成 17 年度後期収蔵作品展「素描展パート 4」

## 散策と美術鑑賞の会

▽ 10月 22 日（土）	ステージV「三角山と大倉山の縦走」
---------------	-------------------

## 教育普及事業

▽ 10月 1 日（土）、2 日（日）	造形教室（テラコッタ）
▽ 11月 3 日（木）	サンクスデー（市民無料開放）
▽ 12月 23 日（金）	クリスマスコンサート

## 卷頭書

### 彫刻と彫刻ではないモノの間

野又 圭司（造形作家）

さて、彫刻とは何か。よく解らないので辞典を引いてみた。

彫刻—1. ほりきざむこと。2. 造形美術の一。木、石、金属などに書画を刻み、または物像などを立体的にほりきざむこと。また、そのもの。丸彫と浮彫とがある。  
（広辞苑）

彫刻—「彫刻」の概念ほど、今日めまぐるしく変貌しているものはあるまい。彫刻とは、本来、不定形の石や粘土や木や石膏に、人間がひとつの形を与えたものであり、そこには彫り刻んだ人間の行為の痕跡が、なまなましい息づかいとなってこめられていた。人体を対象とすることをやめ、それ自身の独自の空間と量を造形した「抽象彫刻」にあっても、作者の行為はなお純粹な形で、作品の中に滯在していた。

しかし、1960年代の「彫刻」は、もはや、本来の意味では彫刻とよぶことができないほどに変貌している。「プライマリー・ストラクチャーズ（基本構造）」とよばれる典型的な傾向では、素材はプラスティックス、アルミニウム、ステンレス、ガラスなどの工業製品に変わり、形態は、球、円筒などの「基本的」なものが好まれ、制作形態も機械的な方法や工場に発注する方法がしばしば用いられ、「彫り刻む」という手仕事の痕跡が意識的に抹消

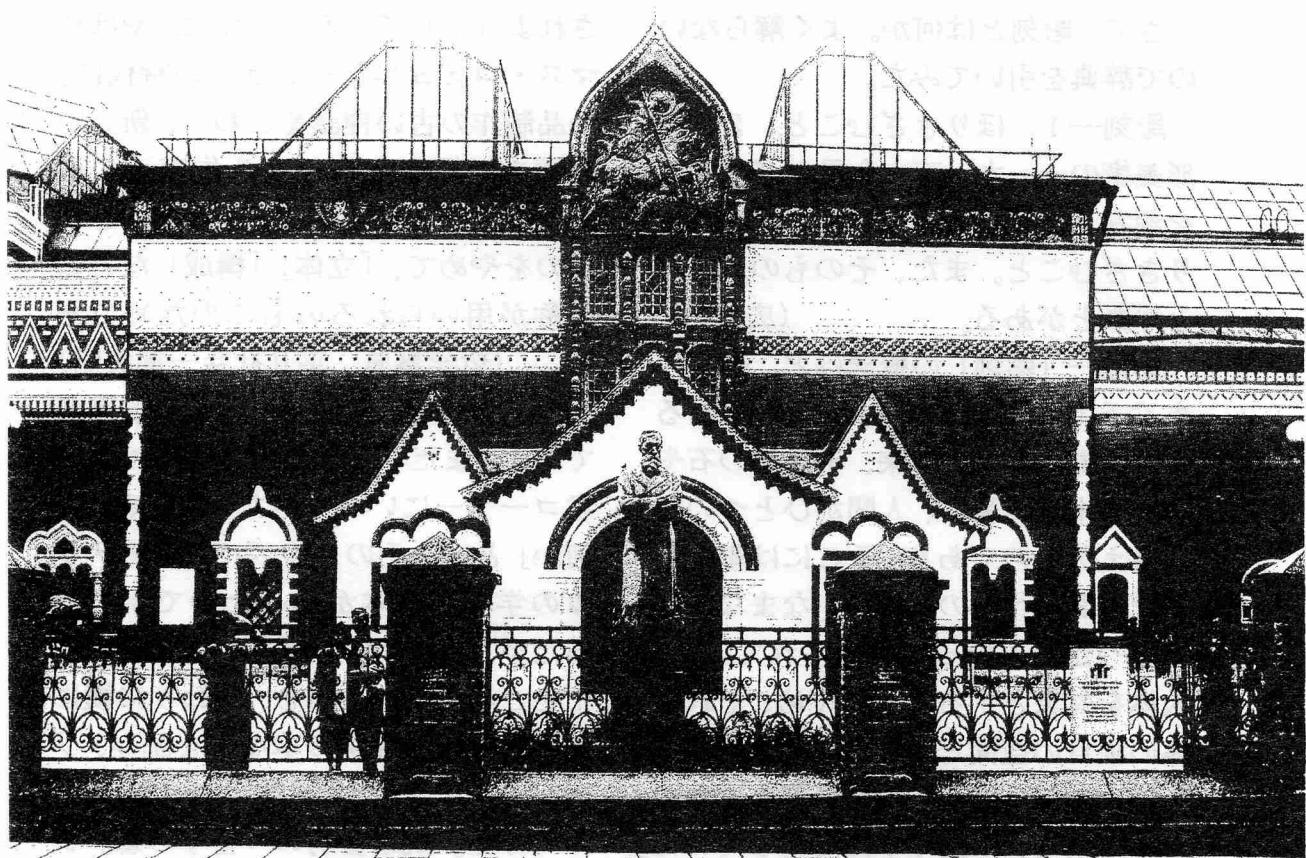
されようとしている。これは、やはりマス・コミュニケーションの時代に、一品制作の古い神話をこわし、新しい空間を把握しようとする作家達の必然的な変貌なのである。「彫刻」とよぶのをやめて、「立体」「構成」などの名称が用いられるのもこのためである。（哲学事典 平凡社=一部省略）

ちょっと古いがさすがは哲学事典である。まだ不安なので図書館の美術書コーナーにいってみた。「彫刻とは何か」というそのものズバリのアメリカの学者？の本があったので手に取ったが、あまりの分厚さに序文を読んだところで読破を断念、かわりに横にあった赤瀬川源平の本などを読み、リハビリしたあと哲学書コーナーに行ってみた。筑摩書房の「哲学の森」シリーズの「定義集」なるものに当たるが残念ながら「彫刻」という項目はなかった。しかし、「芸術」という項目があったので、一応見てみると哲学者や詩人など数人が芸術について語っている中にマルセル・デュシャンの言葉があった。デュシャンは自身のレディーメード作品について、芸術の定義を拒む作品だというようなことを語っている。

（以下9ページへ続く）

# ロシア紀行—トレチャコフ美術館までの長い道

橋本信夫（会長）



トレチャコフ美術館

## 完全防備のボルガ川流域疫学調査

30年ほど前、友人からトレチャコフ美術館の図録を手渡され、素晴らしい作品の数々にいつか必ず訪れようと心に秘めていた。

8月下旬、アムールとボルガの両大河流域の学術調査に参加する機会に恵まれた。約10年間にわたる極東・シベリア地区における野生動物由來の熱病の疫学調査が順調に展開し、遂

にウラル山脈を越えてボルガ流域にまで調査地が拡大したのである。アムールはハバロフスク市、またボルガは中流域のサマラ市を根拠地とし、それぞれの地方伝染病研究所と共同で脳炎や出血熱を媒介する野ネズミを捕獲するのが主目的であった。真夏の蚊やダニのシーズンでもあり、オーバーオールコート、長靴、軍手、防虫ネットで身を固め、捕獲用具を抱えての山

歩きで、かなりきつい作業でもあった。

### 日本語のステン・カラージンに感激

しかし忙中閑を楽しむのが人間の面白さである。調査の帰路、ふと立ち寄ったボルガ河辺の小村の郷土館にイリヤ・レーピンの「ボルガの船曳」の複製が掛けられていた。ここの砂浜でレーピンが絵筆を執ったことである。また、この地域は交通・産業の要所で、かつてはステンカ・ラージンの根拠地だったことも知った。日曜日に研究所員がボートで私たちをボルガの中州に運び、盛大な歓迎パーティーを開いてくれた。雄大なボルガの流れを前にして焚き火を囲み、あつあつのシャシリクを頬張り、ウォッカの

乾杯の合間に日本語でステンカ・ラージンが歌われて大喝采を浴びた。

たまたまボートの

ボルガ流域の中洲にたたずむ筆者

オーナーが美しいフィアンセを同伴していたこと也有って、この河に愛する姫を投げ込んだステンカ・ラージンの悲壮な宿命に思いをめぐらせながらの感激のひと時であった。

### 感動の名画に立ち尽くす連続

帰路、モスクワの「ポリオと脳炎研究所」に寄り、研究打ち合わせを終えてから皆で念願のトレチャコフ美術館（State Tretyakov Gallery）を訪れ

日本語の感動の名画



名画「ボルガの船曳」の舞台となった小村た。ここはモスクワ川を挟んだクレムリンの対岸にあってエルミタージュ美術館と並ぶ国立美術館の一つである。19世紀後半に実業家のトレチャコフ兄弟が収集してモスクワ市に寄贈したロシア人作家の絵画が母体で、1917年の社会主義革命後さらにコレクションが充実し、現在は12万点を超すといわれている。ここでは18世紀以降のロシア作家の作品を一堂に見ることができるばかりでなく、13世紀前後のイコンのコレクションも圧巻である。日本では滅多にお目にかかるないキプレンスキーの肖像画、イワノフ、シリコフやルーピンの大作、15世紀のルブリョフのイコンなどの前では動けなくなってしまう。

いつか札幌でもトレチャコフ・コレクションの見られる日のくることを願わざにおられない。ハバロフスク美術館にはキプレンスキー、イワノフ、ルーピンなどのロシア作家の名品が展示されているが、最近ユジノサハリンスクでこれらの展覧会が開催されるらしい。せめてこれらとでも札幌で再会したいものである。

## 札幌彫刻美術館第12回本郷新賞受賞記念

8月27日-10月10日 石井厚生彫刻展に寄せて

### インスタレーション制作に北海高美術部員も

井上みどり（彫刻美術館学芸員）

札幌彫刻美術館は、日本全国に多数の野外彫刻を制作設置した故・本郷新（1905—1980年）を記念して「本郷新賞」を創設しました。

今年は第12回に当たります。受賞作には、八王子市多摩美術大学本部棟西側プラザに設置された石井厚生制作《時空・140—旅人—》が選ばれました。

受賞を記念して、「石井厚生彫刻展」を開催しています。石井は、1940年、千葉県生まれ。現在多摩美術大学の教授として後進の指導にあたりながら石の彫刻を制作しています。

今回の出品作品は、トラバーチン（石灰岩）とレンガ彫刻を中心に12点です。

レンガの彫刻は、ハーバート・リード著「近代彫刻史」の紙片を混入させたモルタルで接着して積み上げ彫ります。完成した作品は、球体やリング、川原の小石のような形をしています。形そのものは簡潔ですが、削ることでモルタルの目地が偶発的に面白い形をしています。

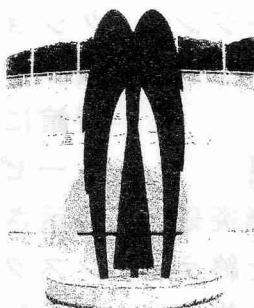
作家が現地で制作するインスタレーションの作品も2点あります。ひとつは、石井氏と本郷新の後輩である北海高校美術部5人がレンガ約2900個を使い、展示室の床に敷き、中央に高さ200センチの塔を積み上げた《時空・169》です。もうひとつは、等間隔に手のひらに乗るような小石状の作品約500個を床に並べた《時空・167》です。2点とも、彫刻美術館と作家との出会いから生まれた、会期中だけの作品です。この機会に、石井厚生の世界を体感してください。

## 河邨文一郎元理事長の詩碑が完成

大倉ジャンプ競技場で除幕式

札幌彫刻美術館理事長を平成6年から14年まで務めた詩人の河邨文一郎さん（昨年3月死去）が作詞した札幌冬季五輪賛歌「虹と雪のバラード」の詩碑=写真=が出来上がり、9月11日、除幕式が大倉ジャンプ競技場で行われた。

詩碑は詩碑建立期成会（伊藤義郎会長）



が設置したもので、制作は友の会顧問で彫刻家の國松明日香さん。國松さんはギリシャ神話の勝利の女神ニケ像をモチーフにした高さ2・5メートルの翼の形をしたモニュメントで、歌詞を刻んだ赤御影石の銘盤がはめ込まれている。除幕式には曲を歌ったトワエ・モアも出席、詩碑をバックに歌を披露して完成を祝った。

# 「野外彫刻めぐり」& 「まちづくりコンサート」

暑かった今年の夏、札幌彫刻美術館を中心とした二つの催しがあった。7月8日の彫刻美術館主催の「市内野外彫刻めぐり」と美術館前庭を会場に行われた宮の森まちづくりセンター主催の「まちづくりコンサート」。彫刻めぐりに参加した会員の大島美和子さん、コンサートを企画したまちづくりセンター所長・高畠修さんから感想と企画の思いを一。

## さわやかな感動と和み

大島 美和子（会員）

7月8日、札幌彫刻美術館主催で、井上みどり学芸員の案内で芸術の森野外美術館ボランティアの解説、さらに、「イサム・ノグチ展」を鑑賞した。

10時、市民会館前に23人が参加、好天で、山内壮夫「希望」がことさら白く美しい。車中、本郷新は「哭」が大好きな作品の一つだったこと。五輪大橋にある「花束」の彫刻は冬の白一色、夏の緑一色の大地に映えるよう金色にしたことなどを話され大変興味深かった。

芸術の森レストランで健康弁当（五穀米など）の昼食後、野外彫刻めぐり。ダニ・カラヴァンの七つの造形物など、自然のどこに作品が隠されているのか宝探しの楽しさを感じた。また、本郷新「鶏を抱く女」は、どっしりとたくましく、とても良かつた。

「イサム・ノグチ展」の会場に入り、各作品に圧倒され、和紙で作られた「2mのあかり」で心が和み、最後一人ずつ通路を抜けると、「エナジーヴォイド」と対峙する。思わず「あー」と声が漏れる。さわやかな気分が湧いてきた。

## 美術館コンサートを企画して

高畠 修

（宮の森まちづくりセンター所長）

上田札幌市長の「元気ビジョン」政策に、地域ネットワークの組織化・地域活性化・地域自立等があり、より具体化した一つが平成17年度事業に新たに設けられた「まちづくりセンター活用事業」です。

私は地域のご理解とご支援をいただき、地域の施設を活用、または触れ合うことをキヤッチフレーズに「芸術・文化とスポーツのまち宮の森大倉山まちづくり」を目指した芸術文化事業の一環として、彫刻美術館コンサートを3回企画しました。

7月22日の1回目は、「まちづくり支援コンサート」と命名、市職員に呼びかけ、「クラシック、映画音楽をマンドリンとギターで」「和の世界を薩摩琵琶、語りと笛、チャッパで」「ソウル&ブルースを洋楽ナンバーで」「スタンダードナンバーをジャズ、ボサノバで」の4ジャンルの構成で午後6時から10時までの長時間の演奏となりました。当日は「カルチャーナイト」の協賛を得、予想を上回る140人近い人たちが入館しました。2回目は「地域の協力で宮の森に住む演奏家の演奏会」を9月23日午後3時開演で無料開催を行いました。

## 「わだつみ像」余聞 <下>

のぼる  
小尾 陸 (会員)

### 5 受難の「わだつみ像」

#### 暴力学生集団の蛮行に激怒

ところで前項に記した立命館大の「わだつみ像」に起こったとんでもない事件とは以下の通りである。

事もあろうに反戦のシンボルである像が大学紛争時の 1969 年 5 月 20 日、全共闘集団により破壊されたのである。午前 9 時半ごろ、像は暴力学生集団によってロープが掛けられ、掛け声と共にあっと言う間に引き倒され、頭は足蹴にされ、鉄棒で力まかせにたたかれた。その結果、頭はひび割れ、左手は無残にもぎ取られてしまった。そして暴力学生は胸に赤ペンキで「死」と書いた上、向かい側の建物前まで像を転がして行き、2 階からロープで吊り下げようとした。しかし、これは失敗。そして落ちた像の上に座り込んだりして騒ぐという蛮行を行ったのである。

これを聞いた本郷新は烈火のごとくになって、「あの像を倒したり、こわしたりすることを是認するグループは、学生であれ、何であれ、戦争をもう一度やろうという力につながる。そうした思想の持ち主だ。それが全共闘なら反戦平和などと言うのはウソだ。学業中途で戦争に行って殺された先輩の嘆きをの人たちはどう考えているのか」と怒り語ったことが伝えられている。なお、後日分かったことだが、驚いたことに破壊を推進した一人は、「わだつみ像」の制作を本郷新に依頼に行った文芸評論家の小田切秀雄であったとのことである。生前に本郷新がそれを知ったならば激怒したことは明白である。当時、文化人と言われる少なくない人が、全共闘運動に共鳴していたが、小田切氏もその一人であったのである。

### 6 「わだつみ像」の再建とその後

#### 再建うながした老女の手紙

その後、直ちに立命館大学を中心に像の再建運動が起ったが、本郷新は度重なる懇望にも首を縊に振らなかった。しかし、「北海道の小さな八百屋のおばあさんが、古い紙に震えながらカタカナで、像を再建してほしい。死んだ息子のためにと、50 円のカンパをいれて送ってきた手紙」を見せられて、末川先生の恩顧にも応えて、再铸造を承諾した。

出来上がった像は防弾ガラスのケースに収められて、図書室に置かれた。その後、92 年

に立命館大に平和教育の原点ともなる国際平和ミュージアムが設立され（館長は安斎育郎教授）、そこに像は移され、現在に至るが、立命館大の専務理事の川本八郎氏は「平和ミュージアムが像を招いたというより、像が平和ミュージアムを呼んだといった方が正しい」と言っている。

## おわりに

彫刻は美の対象として種々な役割を果たしているが、「社会派彫刻家」とも言われる本郷新の作品の中で、「わだつみ像」は「嵐の中の母子像」と共に、これまででも社会的に大きな役割を果たしてきたが、情勢が緊迫してきた今日、今後ますます大きな役割を果して行くものと思われる。

なお、彫刻美術館、立命館大に設置されている像以外に、現在、「わだつみ像」は本郷新の母校である北海高校、長万部の平和祈念館、東京の世田谷美術館、鎌倉の近代美術館別館、和歌山市民体育館にも設置されており、見るものに種々な思いを与えていている。

本稿を記するにあたって、「おやじとせがれ 本郷淳著 求龍堂発行」、「モニュマン彫像の先覚者 本郷新 富岡木之介著 北海道科学文化協会発行」「本郷新 本郷新著 現代彫刻センター発行」「学徒出陣 わだつみ会編 岩波書店発行」「新版 きけ わだつみのこえ—日本戦没学生の手記 日本戦没学生記念会編 岩波書店」および新聞記事、その他を参考にしたこと、特に、北大関係については学芸員の井上さんに資料の提供を受け、大変お世話になったことを付記します。

### (3ページからつづく)

デュシャンといえば昨年暮れから、今年の初めにかけて、日本で大々的な展覧会があったはずだと思い雑誌コーナーに行ってみると、はたして「芸術新潮」のバックナンバーに例の便器を横倒しにした写真が表紙を飾っているものがあった。偶然にも「泉」という作品だが、ところでこれは彫刻だろうか？立体的な美術作品をすべて「彫刻」とよぶのでない限り、答えはノ一だろう。デュシャンはこの作品で「空間を把握しよう」などと思ってはいない。デュシャンは「物体」としての横倒しの便器そのものに关心を持っているのではなく、そのものに付随する「意味」に关心を持って

いる。この違いは大きい。僕はデュシャンは大好きだが、その展覧会を見たいとはそれほど思わなかった。

実物を見なければ解らないモノが彫刻だといえないか？デュシャンの作品は実物を見る必要の無いモノだと思う。（もっとも「実物」といってもレプリカでオリジナルもマスプロ製品なわけで、「実物」ということ自体が無意味）

僕は彫刻のことは何も解からない。けれども自分が彫刻家ではないことだけはよく解る。

# 本郷新の ちょっといい話 2

仲野三郎（会員）

## 第3話 画家村上肥出夫を発掘した本郷新

昭和36年2月、銀座松坂屋である個展が開かれた。作家は村上肥出夫である。村上は岐阜の出身で、自らを放浪画家と称していた。昼は新宿や銀座の街頭で絵を描き、夜は千住大橋の下で寝た。橋げたに畳を敷き、はしごをかけて自分の城を作り、汚れたシーツの上でローソクの光を頼りにサルトルを読んだりしていた。

この作家を見出し、個展まで開かせたその陰には本郷新の並々ならぬ尽力があった。

「2年前春宵の銀座街頭、たしか並木通りの角だった。普段なら素通りするところだったが何気なく覗き込んだ。絵はどれも美しい色をもっていた。それは深く鈍い光の層をもっていて詩情が漂っていた。

私は家に遊びに来ないかと言った。

絵を描くために生きてきたと言う彼の持参したのは、数枚の絵と彼の住んでいる付近のどぶ川から拾い上げた地下足袋や手袋、割れたゴムまりなど。それらは彼の絵と同

じく絵の具にはない不思議な美しい色をもっていた。

一私は村上君を知友の西川武郎氏に紹介した。西川氏は彼の才能を見抜いてあれから2年間、あらゆる援助を惜しまなかつた」

彼は文字通り放浪の画家だった

この展覧会のあと村上はこう言つている。

「僕の絵を見て感激してくれる人がいることは大変嬉しいけれど、僕はそのために生きてきたんだと胸をはって言えるけれど、以前ほど自由でなくなってきたのがわかる。

僕は8年前に東京にひとりで来たように、パリへひとりで行こうと思う。

そこで何が描けるか…決して甘えてはない。

僕はいつも自分を苦しめて、なにくそと思つて絵を描き続けてきた。

まだ、それは終わったわけではない

その後の彼の消息はわからない。

## 第4話 釣りキチ本郷新の釣り仲間

本郷新の釣りの号が抜海であることは、「いずみ」5号で紹介したが、誰が誘ったにしろ当然仲間は彫刻家が多い。釣り紀行は80%が川で、毎年何回かは彫刻仲間と魚を追っている。それをたびたび新聞やタウン誌に書いている。そのいくつかを見てみよう。

F君の場合

彼は岩を噛む怒涛や風波のうねりを見ただけで胸が痛い。したがって船にも弱い。

もっぱら川釣りである。

川辺に立って釣り始めるまでに彼は誰よりも時間をかける。仕事がおそいのではなくわざとゆっくりやっているふしがある。

先に竿を出した仲間の一人が早くも一匹釣りあげても、悠々と空を仰ぎ縁に親しみ、花を摘み、鳥を聞き、石ころをひろって眺めいったりしている。

白い美しい大理石の女の顔を、永年飽きもせずほりつづけ、悲しい物語も美しく作

つてみせる、物静かな彫刻家である。

#### ※ H 君の場合

彼のアトリエに一步足を踏み入れると、あの壁この壁すべて魚に関する事ばかり。ルアー、毛鉤の竿から、海川、長短の竿が並ぶ。海でも川でも湖沼でも、冬でも夏でも、どんな魚でもいつでもこいの体制が出来上がっている。

彼の車に乗ると、時々首すじに虫が走る。捕らえてみれば、川釣りの餌にするブドウ虫やイタドリ虫で、これがいつでも車の中を這いまわっているのだ。

木でも石でも、ブロンズ铸造も蠍型作りも、立体もレリーフも、何でもできる彫刻

家だ。

ここまで読めば、F 君、H 君が誰だかわかる。H さんは後年免許取り立ての時の釣り行きでとても緊張し、それがバレないよう運転したが、いつもの駄洒落が出なかつたと、述懐している。

そして本郷新はこの文を次のように結んでいる。

最後にもう一人の H という彫刻家一僕という釣り人のことは自分ではぜんぜんわからないから始末がいい。

### 本郷新生誕 100 年記念シンポジウム「野外彫刻のアートツーリズム」提言要旨

2005・6・11 札幌市教育文化会館で開催

#### 「アートツーリズムの実践者として」

道立近代美術館長

水上武夫

昨年、14 日ほどかけて米国の美術館 18 館をめぐるツアーを企画した経験から言えば、絵はたくさん見たほう良いが、絵だけでは飽きる。ツアーの途中で食べる、美術以外のものを見る、ショッピングをするなど、美術から離れたを取り入れた。アートだけではどうにもならない。アートとグリーンツーリズム、エコツーリズムなどをどのように組み合わせるか、これが大事。

北海道でアートツーリズムをやる場合、食べ物と風景を組み合わせることが必要。ただ、食べ物はおいしいが、どこに行っても同じものが出てくる。さらに食べる場所の情報がない。風景にしても、なぜそこに彫刻があるのか、その背景のつながりがわからない場合が多い。つまり、いろいろな情報を伝えるシステムとしての連係の深いパンフレットが必要だ。情報の工夫がまだまだ足りない。それらを役所依存ではなく地元の人たちのポケットタイムで作るべきだ。多くの知恵を集め、知恵を見つけた人から実践しないといつまでも何も変わらない。新しい北海道をアートという視点で旅するということは、それが唯一の方法というわけではない。テーマを美術ではなく、農業でも環境でもいいわけであるが、一つのテーマでは持ちきれないだろうと思う。それぞれのテーマで研究している人が一同に会して議論することも必要であると思う。

#### 「本郷新の思い出」

画家

柄内忠男

本郷新さんは長生きがしたかった。自信があった。生命線が長かった。手相見が好きで、「おれは 90 歳まで大丈夫だ」と言っていた人が 74 歳で逝った。長生きをして仕事をしてほしかった。

本郷さんは北中（今の北海高校）が大好き、北海道、札幌が好きだった。最後、病気になった時、札幌に住みたかったができなかった。本郷さんが札幌に来ると私と彫刻家の本田明二の3人でススキノに行った。私と本田さんがラーメンを食べると本郷さんはカレーライス。カレーライスが好きだった。でも先にラーメンが来ると「おれもカレーライスを注文すれが良かった」と大の大人が子供のようなことを言う。こんな話がいっぱいある。横断歩道で赤信号でも渡ってしまう。「おれアカデミックなもの嫌いだ」。ススキノで遅くなつたのでホテルに送つてわれわれだけで元の飲み屋に戻ると本郷さんがもう戻っていた。それくらい元気が良かった。それからまもなく本郷さんががんだとわかつた。がんになってから札幌にきたころは酒を飲んでいなかつたが、いいプランナーがあった時、お湯割りにして飲んだことがある。それが最後だった。

発病するころ、北海学園に芸術学部を置き、おれは彫刻の教授になって北海道の彫刻家を育てたい。土地全部寄付するからお前学園に話してくれと言わされたことがある。しかし、土地の面積が足りず、後刻、学園から会いたいと話があつたときは会えなくて終わってしまった。私は本郷さんから芸術を20年にわたって教わった。本郷さんとの出会いは私の宝のようなものだ。ありがとう。

### パリからモスクワへ「彫刻の道」計画 オットー・フロイントリヒ(1878~1943のこと

彫刻家 山谷 圭司

1904年、二人の若い彫刻家が故国を後にした。一人はルーマニアからパリへ、もう一人はポンメルン（現ポーランド領）からフィレンツェへ、奇しくも、歩いてのアルプス越えだったが、その後の運命は対照的だった。ルーマニア人は世界的名声のうちに天寿を全うし、ユダヤ系ドイツ人はナチの強制収容所に消えた。この二人はほぼ同時代にパリで活動していて、30年代後半にはそれぞれ画期的なプランを発表していくながら、一方は見事に結実して今日に伝えられ、もう一方は芸術家のヴィジョンのまましばらく忘れられていた。プランクーシのティルグ・ジュ公園とフロイントリヒの「諸民族を彫刻によって結びつける平和の道」—パリからモスクワへ—構想である。この構想はその後、メキシコ五輪の際（1968年）「国際友好の道」として誕生し、71年からは現在までドイツでコルンブルスト教授のイニシアチブのもとで「ヨーロッパ平和の道」として続けられている。この100年間、彫刻家たちもまた時代にどう答えるか模索し続け、この連環の中にイサム・ノグチも本郷新もいた。

### 北海道野外彫刻 Web の開発

道情報大助教授

斎藤 一

モジュールを公開、他の地域においても野外彫刻に関するWebサイトを構築できるよう、準備を進めている。北海道彫刻Web(以下 HSW)は、普段意識されることの少ない野外彫刻を広く一般の人々に知ってもらうことを目的とし、さっぽろ観光情報学研究会アートツーリズム研究プロジェクトの一環として我々が開発している一種のWebデータベースである。HSWは、野外彫刻写真家の仲野三郎氏の撮影した北海道内の野外彫刻2100作品を主なコンテンツとしている。これらの写真に、札幌彫刻美術館友の会の方々の協力を得ながら、彫刻名、作者名、展示場所等の情報を付加し、データベースを構築することを研究の第一段階としている。システムはオープンソース（公開を前提としたプログラム利用規約）のXOOPSを利用して開発しており、今後、その機能をまとめたモジュールを公開、他の地域においても野外彫刻に関するWebサイトを構築できるよう、準備を進めている。

## ギャラリーシリーズ 9

### 「道新ぎやらりー」

このギャラリーは平成15年10月、札幌の都心にある時計台ビルの地下1階にオープンした。道新の「文化教室」を主宰する道新文化センターが創立30周年を記念して開設したものである。

この文化教室は当初、女性を受講対象とした刺繡や紙人形、染色工芸、リズム音楽、書道などの教室としてささやかにスタートしたが、年々、受講者の増加と共に教室を増やし、現在、絵画、彫刻、書道、写真、手工芸などの講座は道新大通館だけででも140講座を超えている。

この「道新ぎやらりー」の第1の役割は、これらの講座の講師や受講生に作品発表の場を提供するところにある。ギャラリーの面積は37坪（壁面長37㍍）、使用期間は1週間、使用料金も手ごろで個展やグループ展には格好のスペースであろう。開設2年目の本年は、ほぼ一年先まで埋まっており、その半分は道新のカルチャー教室に関連する展覧会であるという。そのほかは道内の若手の作家や長年趣味として研鑽してきた人たちの作品の展示会が多いようだ。

昨年11月、開設1周年を記念して開いた企画展、ミニプリントの全国公募「道新ぎやらりー版画大賞展」や他団体と連携して主催した「スウェーデン手工芸品展」などは「道新ぎやらりー」の持つもう一つの側面を示すものであろう。（原 典夫・会員）

場所：札幌市中央区北1西2札幌時計台ビルB1  
水曜休廊。開廊時間：10時から18時

## 抜海の目

### なぜ、そこにあるのか

北海道開拓使の判官として札幌のまちを開いた功労者である島義勇は、その功績が顕彰され、札幌市役所1回ロビー東側に、彫刻家山内壯夫氏が制作したブロンズ像が置かれている。北海道神宮にも、宮地寅彦の作による島義勇の像がある。

北海道新聞7月13日夕刊の特集「札幌市役所の七不思議」のひとつに「島判官はどこを見る？」という記事があった。

刀を腰に差し、右手を額にかざして遠くを眺めている像は、西を向いており、市庁舎管理課によれば、「自ら街づくりを構想した円山を眺めている」。市庁舎ロビー左側は、「札幌の過去を顧みる場所」なのだという。その島判官像の土台に刻まれた「四通八達宣開府」という文字は四方八方に通じる土地という意味だそうである。

札幌開拓の基点といわれている創成川沿いには、松田与一作の札幌開拓の祖、大友亀太郎の像がある。創成川の前身となった用水掘りである大友掘りを作った大友亀太郎としては、親しみのある場所であり、一時工事のために移設される「札幌村郷土記念館」もいわば里帰りといえるのかもしれない。

さまざまな像（野外彫刻）がそれぞれの場所にある。それはただそこにあるだけではない。むしろ、そこにあることが、像だけでなくその場所も引き立てているのではないだろうか！どうしてここに、なぜそこにあるのかということを考えることも大切ではないだろうか。

## ビデオ制作第2弾に挑戦！

「時代を映す彫像たち

—野外彫刻に学ぶ札幌の歴史—

10月撮影完了めざす

札幌市生涯学習センターの委託を受けて友の会が今春、初めて完成させたビデオ「本郷新の野外彫刻の魅力」に続いて、来春完成をめざして2作目のビデオ制作が始まった。

タイトルは「時代を映す彫像たち—野外彫刻に学ぶ札幌の歴史」で、市内各所に散在する北海道開拓の歴史を伝える彫像に的を絞り、制作者、設置の経緯、エピソードなどを織り交ぜながら、開拓の歩みを振り返る。彫像14,5本を候補に、約15分程度の作品に仕上げる計画。

取り上げる彫像には北大構内のクラーク像をはじめ、エドワイン・ダン、ホーレス・ケプロンなどお雇い外国人、島義勇、大友亀太郎のほか、本郷新「雪華の像」「泉の像」などが候補に上がっている。

冬期間の撮影をなるべく避けるため10月末までに主な像の撮影を終わらせる考え方で作業が進められている。

**編集後記**▼今年の夏は13号の編集に取り掛かった8月末になっても残暑が厳しく、秋風が待たれました▼11号から3回にわたった小尾陞さんの「わだつみ像余聞」が終わりました。わだつみ像に秘められた貴重な話が印象的でした▼ビデオ制作第2弾、橋本会長ほか多くの会員のエネルギーに脱帽。いい作品になることを祈念（大内）

## 展覧会案内

### ■伊藤幸子彫刻展

9月14日—10月2日（月曜休み）

ギャラリーミヤシタ（12:00—19:00）

（札幌市中央区南5条西20丁目1-38）

### ■國松明日香個展

12月1日—31日 ぎやらりーどらーる

（札幌市北4西17ホテルどらーる1階  
622-2211）

### ■さいとうギャラリー企画展

「ゆく年くる年」道内在住作家の絵画・造形作品

12月20日—1月8日（12月26日—1月1日休み）

さいとうgallary（10:30—19:00）

（札幌市中央区南1西3ラ・ガレリア5階222-3698）

### ■現代美術の先駆者たち展

宮の森ミュージアムガーデン「宮の森美術館」

10月7日開館（11:00—20:00）

札幌市中央区宮の森2条11丁目2-1（612-3500）

札幌彫刻美術館友の会ホームページ

<http://sapporo-chokoku.jp>

彫刻美術館友の会 会報「いづみ」No.13

2005年10月1日発行

〒064-0954 札幌市中央区宮の森4条12丁目

財団法人札幌彫刻美術館内

Tel・fax: 011-642-5709

発行人 濱 久子

編集委員の連絡先：電話とファックス

斎藤美年子: 011-643-7246

濱 久子: 011-893-5212